(4)キャリア形成を軸とした総合人間科の取り組み

中学１年生

総合人間科の中高一貫カリキュラムの導入期を支える「生き方を探る」実践
～『出会い』から人生の足跡をたどる～

木下雅仁・佐光美穂
中村明彦・原　順子
高橋伸行

【抄録】　本校におる「総合学習（総合的な学習の時間）」の実践は、平成７年度にスタートした『総合人間科』の取り組みによって生み出された蓄積に負う部分が大きい。現在ではこの取り組みも軌道に乗り、プログラムも年々改良が加えられ、内容もますます充実してきた。中学１年生では、「生き方を探る」をテーマに、さまざまな職業や社会的活動をしている人たちにインタビューを行うフィールド・ワークを軸とした系統的学習を、１年間に渡って続けていく。また、この学年は、中高一貫６年間の総合人間科のプログラムの導入期にあたり、総合人間科の学習を進めていく上で求められる様々なリサーチ・スキルの習得を重視したシラバスに基づいて実践が進められていく。本稿においては、平成13（2001）年度の中学１年生の総合人間科の取り組みの軌跡を概観しつつ、この実践について若干の自己点検・自己反省的考察を行うことを主たる目的とする。

【キーワード】　生き方　出会い　スキル・トレーニング　learning outcomes（学習成果）

１．はじめに

本校における「総合学習（総合的な学習の時間）」の実践は、平成７年度（1995年）にスタートした『総合人間科』の取り組みによって生み出された蓄積に負う部分が大きい。プログラムに年々改良が加えられてきた結果、現在ではこの取り組みも軌道に乗り、内容もますます充実してきた。

「１―２―２―１制」のカリキュラムの方針にしたがい、中学１年生では高校３年生と共通の「生き方を探る」というテーマを掲げ、自らの生き方決定や進路選択の学習にもつながる研究テーマを扱っている。個人研究が活動の中心となるのだが、実際に生徒たちが設定する研究テーマは極めて多岐に渡り、幅広い視点や興味・関心から総合人間科の学習に取り組んでいることがわかる。また、最終的に「フィールド・ワーク発表会」の実施や「研究集録」作成などの活動によって、個々人の学習の成果や調査結果を共有することから、この総合人間科の取り組みにおいては、深みと奥行きのある「協同学習」が実現され、「学び合い」の場を生み出すことにもつながっている。

日常の学校生活全般に関わりと影響を持ち、生徒たちの生き生きとした主体的学習活動と生き方の模索を促進する総合人間科の取り組みは、本校における中高一貫６年間の学びと成長を支援するカリキュラムのバックボーンとして安定期をむかえており、中等教育における教育実践の世界においては高い評価が与えられていることは自他共に認めるところであろう。

ところで、学習指導要領の改訂に伴って、平成14（2002）年４月より全国の小・中学校で一斉に「総合的な学習の時間」が導入されることになり、全国至る所で様々な取り組みが展開されている。本校は、総合人間科のカリキュラムをいち早く開発・実践し、全国の学校に先駆けて「総合的な学習」に取り組んできた。「モデル・スクール」あるいは「パイロットスクール」として、本校は重要な役割を果たし、大きな成果をあげてきたが、今後は「総合的な学習の時間」に関わっては「リーディング・スクール」としてさらなる発展を期し、本校における教育実践から得られた蓄積を全国の教育実践の現場に還元しながら、社会的期待に応え、教育界への貢献を続けていくことが求められるであろう。

そのような時流が背景にあることから、本稿においては平成13（2001）年度の中学１年生の総合人間科の取り組みの軌跡をふり返ることによって、平成７（1995）年以来積み上げてきた実践の蓄積から受け継いだ「遺産」との関わりを意識しつつ、若干の自己点検・自己反省的考察を行っていくことにする。

２．学年テーマと「キャリア形成」との関わり

中学１年生の学年テーマは、平成７（1995）年に総合人間科がスタートした時以来、一貫して「生き方を

探る」を掲げてきた。平成7（1995）年度当時、本校は文部省(当時）の研究開発学校の指定を受け、「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発」の実践研究を行っており、その柱として総合人間科が設置されたことから、その関わりにおいて、当時の中1の総合人間科の目標は次のように設定された。「本校での中高6カ年の生活を始めるこの時期において、自分はどういう人間なのか、自分は何をしたいのか等、自分を客観的に見つめたり、そして自分の頭で考え責任を持って行動したりする力、自分の将来を自覚的・主体的に選択していく力の基礎を作ることを、この科目の中1での目標とする。(寺井一他，1995)」この目標は、具体的には「『出会いから学ぼう』というテーマのもとで、生徒が世の中の様々な人・物・出来事等に積極的に出会い、見聞を広め、クラスメイトと議論する機会を少しでも作ることにした（徳井輝雄他，1996)」ことによって実践された。「自分の人生を自覚的に選択してゆく力」を育てるためには、自己を見つめ、自己を発見し、さらには自己を拡大していく体験の積み重ねが重要であると考え、様々な体験学習をベースに置いた「自分探し」的な要素が全面に打ち出されていた。

学年プロジェクト（サブテーマ）の変遷

1995年度	人と地域から・自己発見の機会
1996年度	人と地域から生き方を探る
1997年度	出会いから学ぶ
1998年度	新たな出会いから学ぶ
1999年度	人との豊かな学び合いから考えよう
2000年度	出会いから学ぶ
2001年度	『出会い』から人生の足跡をたどる

「自分の生き方を考える」という方向性は次年度以降も確実に受け継がれていったが、毎年、「生き方を探る」という学年のメイン・テーマのもとに学年プロジェクトとしての「サブテーマ」が設けられ、その年度ごとに担任団独自の味付けが施されてきた。その影響から、年度ごとに重点が置かれる要素は多様化していくことになる。各年度の重点目標の特徴は、次のような表現から確認できよう。「他人の価値観を尊重しながら自分の考えを確立して、自分の人生を自覚的に選択していく力を育てていく(矢木修他，1997)」、「さまざまな生き方を探るようなコミュニケーション能力を育てることが目標にあげられる(中村明彦他、1998)」、「多くの人々の生き方や価値観を認識し尊重した上で、自らの生き方を考え、これからの人生を自覚的に選択していく力を養う（川合勇治他、1999)」「友人との学び合いの場をつくり、さらに、そこで気づいた問題に関して討論するなかで、多くの考えを学んだり、人から学ぶ楽しさを知り、それを足場として生き方を探る基礎作りを行う（石川久美他、2000)」。

平成12（2000）年度より3年間、文部省（当時）から研究開発学校としての指定を受け、「高大の連携を生かした『青年期のキャリア形成』―総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発―」をテーマに研究実践が進められたことから、総合人間科の目標に「キャリア形成との関わり」という新たな視点が盛り込まれることになった。その結果、平成12（2000）年度の中学1年生の総合人間科の取り組みは、次のような指針に基づいて実践されるに至った。

> 中学1年生は思春期前期という発達段階で、これから自分の考えや行動を広げよう、深めよう、とする時期である。この時期のキャリア教育は、どんな職業があるのか知ることと、職業に興味を持つことが目標になると考える。また、キャリアを広義に「生き方」と捉えると、これまで本校で進めてきた総合学習はまさしくキャリア教育である。今回はこれまでの総合人間科に「職業興味の形成」という視点を加えて実践した。(原順子他，2001)

平成7（1995）年からの本校における総合人間科の取り組みの歴史の中で、「生き方を探る」中1の取り組みを、「キャリア形成」という概念と関連づけて、中高一貫のキャリア形成プログラムの中に初めてはっきりと位置づけ、また、特徴づけた点において原順子他（2001）の記述は注目に値する。

本稿で取り上げる平成13(2001）年度の取り組みは、3年間の研究開発の実践の2年目にあたることから、基本的には平成12（2000）年度のキャリア形成を意識した方針を踏襲した上で実践を行った。その上で、学年で設定したサブテーマは「『出会い』から人生の足跡をたどる」とした。ここで意図されたことは、「自分の生き方探し」が、単なる「職業調べ」に傾きすぎないようにするため、インタビューの対象とした相手の「生き方・生き様」を知ることは、あくまでも“入口”であって、その人たちが何との『出会い』を通して生き方選択を行ってきたのかという核心に迫り、また、現在の生活・人生においてどのような『出会い』を経験しているのかに注目させることであった。2001年4月16日に行った第1回目の総合人間科の授業においては、次のような「総合人間科の学年テーマ（目標)」を

生徒たちに提示した。

「身近な人（第１回フィールド・ワーク：ペアを組んだクラスメートの保護者等）」から「自分が興味のある活動をしている人・職業に就いている人（第２回フィールド・ワーク：幅広い職業人・社会人）」へと視点を広げながら、その人たちの人生においてどのような『出会い』がきっかけで人生の方向選択（生き方や職業などに関連して）をしてきたのかについて知り、自分の生き方決定の土台を固めるきっかけを得る。」

キーワードは「きっかけ」である。中学１年生の「生き方を探る」取り組みにおいては、１年生の学年が終了する時に自分の生き方の方向性がつかめていることがひとつの到達目標であるが、その過程においてどのような「きっかけ」で自分の興味・関心や可能性、進路が開け得るのかを知ることは、心豊かに中学校生活をスタートする上で重要であろう。「１人の友人との出会い」、「ある言葉との出会い」、「一冊の本との出会い」、「ある場所との出会い」など、人生を切り開き、生き方に影響する事柄はいくらでも身近なところに存在するはずである。

また、そうした「きっかけ」の多くは、偶発的に発生する物ばかりではなく、主体的で前向きな生き方をしていないと出会えないことがフィールド・ワークにおけるインタビューを通じて体験的に実感することが出来るであろう。

こうして考えてみると、キャリア形成との関わりで総合人間科の取り組みをとらえるようになっても、平成７（1995）年の総合人間科創設期当時に掲げられた「自分の人生を自覚的に選択してゆく力」の育成するという精神は現在でも脈々と受け継がれていることがわかる。

３．スキル・トレーニングの重要性

(1)なぜスキル・トレーニングを重視するのか

先述の2001年４月16日に行った第１回目の総合人間科の授業でおこなったオリエンテーション用資料では、もうひとつ「総合人間科の学年テーマ(目標)」が生徒たちに提示された。それは、「中高一貫(特に『１-２-２-１』制を意識して）の学校生活の入り口にたち、総合人間科における取り組みを計画的に、効果的に、そして体系的に進めるための、スキル（知識とテクニック）や基礎知識（常識）を身につける」というものであった。この表現からもわかるように、理念的な目標と併記してスキル・トレーニングを目標として掲げた点において、この年度の取り組みの特徴の１つが浮き彫りにされよう。

ここでいう「スキル」が意味する物は多岐に渡っているが、あえて中心的なものを挙げると次のふたつの側面が考えられる。

オリエンテーション時の資料より抜粋

総合人間科の学年テーマ（目標）

◆１　「身近な人」から「自分が興味のある活動をしている人・職業に就いている人」へと視点を広げながら、その人たちの人生においてどのような『出会い』がきっかけで人生の方向選択（生き方や職業などに関連して）をしてきたのかについて知り、自分の生き方決定の土台を固めるきっかけを得る。

◆２　中高一貫（特に「１-２-２-１」制を意識して）の学校生活の入り口にたち、総合人間科における取り組みを計画的に、効果的に、そして体系的に進めるための、スキル（知識とテクニック）や基礎知識（常識）を身につける。

具体的な学習課題

①何を知りたいのか？
・自分が持つ「興味」や「関心」と世の中の仕組みとの結び付け方について学ぶ。

②フィールドワーク（実地調査）に出かけよう！
・目的地までの交通経路の調べ方やその利用方法、またそのための情報の集め方について知る。

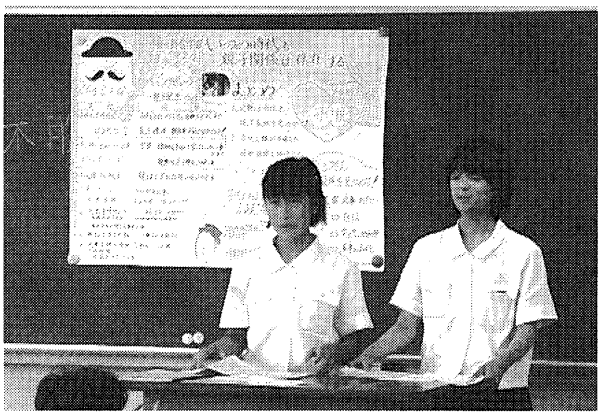
③中学生としてのマナーや態度を身につける
・一般の方にインタビューするためのマナーやエチケットを学ぶ。
・アポイントメント（インタビューの約束）の取り方に始まり、依頼状とお礼状の書き方など。

④みんなの前で発表報告をしよう！
・新しく知ったことや発見を報告書にして整理し、また、その内容を工夫を凝らして人前でわかりやすく発表する。

⑤ともに学ぶ『総合人間科』
・自己評価、他者による評価（クラスメート、訪問先の方、先生など）を通して。

①コミュニケーション・スキル

フィールド・ワークのためにアポイントメントを取るために先方に電話をかけること（あるいは、その連絡先を調べること)、依頼状・お礼状を書いたりすること、フィールド・ワーク報



告会でクラスメートの発表について質問をしたり討議ができる力など。

②リサーチ・スキル（学習スキル）

予備知識を得るためのプレ研究を遂行する能力、インターネットや書籍より資料を見つけだす力、調査で得た情報を整理する力、プレゼンテーションを効果的に行う力など。

このようにスキル・トレーニングを重要視する背景には、次の２つの要因が挙げられる。

第１点目は、中学１年生が中高一貫校である本校における導入期であり、今後６年間にわたって本校で総合人間科の取り組みに対応していけるようなスキルの習練と獲得を目指したトレーニングをこの時期にしっかりと行っていくことが期待されているからである。

第２点目は、高度化・複雑化する社会状況へ対応するためである。これは特にリサーチ・スキルを念頭に置いての指摘であるが、現代社会におけるシステムや慣習が年々急速に高度化・複雑化を進めていることは言うまでもなく、フィールド・ワークでインタビューに行っても、予備知識・背景知識なしでは、相手の話の内容が理解できないことが多い。こちらは学校の学習活動の一環でフィールド・ワークなどの取り組みをしているつもりでも、インタビュー相手は社会の第一線で活躍する職業人・社会人である。知識や経験は中学１年生とは比較にならない。せめて出来る限りの事前学習による予備知識や背景的知識を獲得した上で臨まなければ、フィールド・ワークの成功は遠のいてしまうだろうし、後々のフィールド・ワーク報告会（発表会）や報告書作成の折に、苦労することが予想される。「ただフィールド・ワークに行っただけ」で終わらないようにする努力が求められるのである。

総合人間科の時間には、個々の生徒たちが自由に自分たちが持つ興味・関心をふくらませたり、あるいは、発見したりして、思い思いの立場から学習を進めていくことができる点が魅力の１つである。主役はあくまでも個々の生徒であり、普通教科の授業などで見られる「教える」立場の教師による画一的な指導は望まれないはずである。それなのに、ある意味では教化的なスキル・トレーニングを総合人間科の目標の１つとして位置づけることには、「マニュアル通りに」しか学習が進められない生徒を生み出すことにつながるのではないかという危惧の声が寄せられるかもしれない。しかし、「知識」と「スキル」は車の両輪のように、相互補完しながらバランスを保って獲得されるべきものであると考えることから、総合人間科の目標には知識や理解、あるいは情報収集などの観点に基づく目標と、コミュニケーション・スキルやリサーチ・スキル（学習スキル）などの獲得を目指す目標とが、ともに配列されることこそが望ましい在り方ではないであろうか。

(2)生徒や保護者はスキル・トレーニングをどのように考えているのか

４月に総合人間科の取り組みを始めてまだ日が浅い５月中旬には、第１回フィールド・ワークを行った。ペアを組んだクラスメートの家庭を訪問し、相手の保護者や祖父母などにインタビューし、様々な物事や出来事との「出会い」に関わるエピソードを聞かせてもらうという取り組みである。その際に、インタビューを受けてもらった方に「アドバイス・シート」を記入してもらい、今後の取り組みに役立てられるようなフィード・バックを得ることにした。そこでは「良かった点」と「アドバイス（今後に向けて改良したらよいと思われる点）」という項目を設け、記述式の回答を求めた。そこに見られるコメントの大半は、生徒たちのコミュニケーション・スキルやリサーチ・スキル（学習スキル）に注目したものであった。以下に主なものを取り上げてみたい。

○第１回フィールド・ワーク保護者のコメント

①良かった点

・とても丁寧な言葉づかいと、きちんとした態度に、とても好感が持てました。

・言葉づかい、あいさつ、質問の仕方など、とても落ち着いて、丁寧に出来ていて良かったと思います。

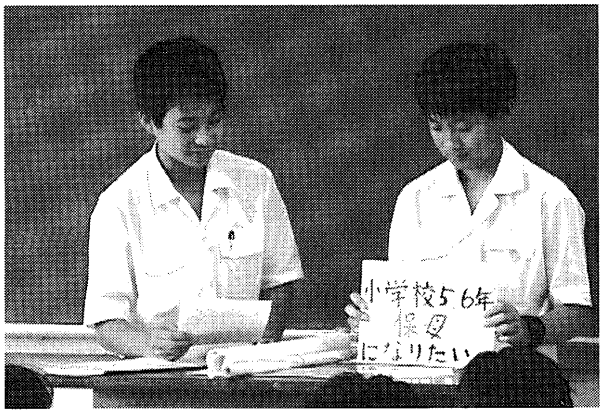
・テープレコーダーやカメラを用いてインタビューを実施していた。

・質問の回答を正確に記述できていた。

・最初から最後まではっきりとした口調と言葉づかいで意欲を感じ、真剣なまなざしでしっかりと目を見て話を聞いてくれたので、とてもよい印象を受けました。

・質問がすべて済むまで集中してインタビューできた点。
・質問内容の順番が良く、整理されていて答えやすかったです。
・筋道たててのインタビューで、言葉づかいも態度もきちんとしていて、とても好感が持てました。
・メモを熱心にとる姿には感心しました。
・質問もてきぱきと行われ、時間通りに終了できました。初めてとは思えないほど素晴らしかったです。
・事前に質問したい事項と回答スペースをまとめた
・インタビュー用紙を準備し、その内容にしたがって順序だてて聞き取りした点。
・テーマがスポーツということで、私も関心のある内容でしたので、逆に私からの質問にもしっかりと答えてくれました。
・質問の流れも良く、熱心さが伝わってきました。
・しっかり質問することをノートにまとめてあり、落ち着いて順番に質問していた。こちらの言うことにもちゃんと耳を傾けメモを取っていた。
・人との出会い、関わり合いについて一貫性が有り、とても良い質問内容でした。
・質問がよく考えられており、具体的でしたので答えやすいと思いました。また、質問と質問との関連づけがきちんとしており、内容を深めることが出来たと思います。

②アドバイス（次回に向けて改良したらよいと思われる点）
・インタビューをした内容は、走り書きのメモ程度にして、たくさんメモを残して、あとでまとめる事が出来るようにしてはどうでしょうか。



・とても難しいのですが、用意した質問を順番にするだけではなく、その場に応じて順番を変えたり、足したりできるともっと内容が深まっていくのではと思います。
・ひとつの質問を深く聞いて、そこから自分の意見を出すのもいいのではないでしょうか。
・自分の感想や「私はこう思うのですが....どうですか」というのも織りまぜてみても良いかもしれませんね。
・私へのインタビューのテーマは「喜怒哀楽」についてであったが、事前にもらった依頼状だけではどんなことについて尋ねたいのか抽象的すぎて予測がつけにくかった。今後はもっと具体的なテーマで依頼したほうが、答える側が事前に準備しやすいし、的確な答えが得られやすいと思う。
・今回のような話の進め方で大変良いと思いますが、質問が多すぎると相手の返答が長い場合、30分で終わらせるのは難しいので、時間のことを考えて話を進めた方が良いと思います。
・似た質問が続くと、答えが重複しますから、本人の質問の意図を簡単に話していただけると違った回答が出来たかもしれません。
・インタビューする相手の仕事などについて、事前に調べたりしていると、より内容が深まったと思います。
・事前にインタビュー相手の仕事について、基礎知識を勉強しておくと、違った観点からの疑問が出ておもしろい質問ができるかもしれません。
・用意していた質問内容とは別に、「話の流れ」に沿った質問が出来たら最高です。
・2、3の質問の意図がわからないものがあり、なんとなく答えてしまいましたが、その答えで良かったのか、違う意味だったのか？
・それぞれのインタビューに対してコメントを

記入していなかったようですが、それはカセットテープがあるからだと思われますが、その中でも自分の心に残ったこと、自分の意見と同じ、または違うことなど、少しでも単語を記入していたら、全てのインタビューが終了した後にもう一度見直してその事柄についてもっと深い話が聞けるのではないかと思います。

・具体的な質問に入る前に、インタビューの目的や内容についての簡単な説明があると、答える側としては答えやすくなると思うのですが....。(例)「中学時代の友人関係や長い人生の中での中学時代について考えてみたいので、お母さんの中学時代の様子をインタビューさせてください。」

・インタビューの内容が事前にわかっていたら、もっと的確にお話できたと思います。また、紙面でいただければお話ししやすかったと思いますが....。

・質問の返事が聞きたかった事とずれている場合は、もう一度質問の趣旨を伝えて、聞き直すと良いと思います。

・相手の話に相づちを打つと、相手も話しやすいと思います。

・今回、インターネットで事前に情報を得てきてくれましたが、先入観になってしまわない事前の情報・調査は必要なことかもしれませんね。

・聞き取りした内容について素早く簡潔にメモをとる訓練を重ねることが必要。

・初対面の誰に対しても、恥ずかしがらず、大きな声ではっきり自分の方から挨拶できるようにすること。

・質問して、答えてもらうというパターンに固執せずに、相手との会話を楽しむように進められるようになると良いと思いました。

・全体に早口に感じられ、聞き取りにくい点がありました。あせらず、ゆっくりと的確に事を進められるともっと良くなると思います。

・次回は例えば、カセットテープレコーダーなどを使って、録音をしながらインタビューをし、後でそのお話の内容を編集するという方法などを取り入れてみても良いのではないでしょうか。

・話を聞くときのメモの取り方を工夫したらよいと思いました。全て書き取ろうとすると大変だと見受けました。

・このインタビューをどのように自分の生き方に生かすのかも伝えると良いのではないかとと思いました。

以上の保護者からのコメントを読んでみると、「良かった点」としては、あいさつ、礼儀、話し方、態度、言葉づかい、アイコンタクトなど、コミュニケーション・スキルに関わる要素が高く評価されていることがわかる。その一方で、「アドバイス(次回に向けて改良したらよいと思われる点)」については、テーマの選び方、質問項目の内容（質・量)、質問のさばき方、記録の方法（メモの取り方）など、リサーチ・スキル（学習スキル）に改善の余地があるというコメントが集中している。このことから考えると、５月の第１回フィールド・ワークの段階までに、もう少しきめ細かなスキル・トレーニングを行うことを検討する必要があると言えるのではないだろうか。

○総合人間科の取り組みと生徒のコメント

次に、生徒の考え方に注目してみたい。１年間の総合人間科の取り組みが終わった段階で、「１年間の総合人間科」で学んだことは何か。１年を経過した総合人間科はあなたにとって何だったか」という記述式のアンケートを行った。回答の中には次に挙げるような「自己の内面的成長」を評価する肯定的なコメントが多々見られる。

・たくさんの人たちから様々な意見を聞いて、自分の考えをいろいろなことに発展させることができたとても大切なもの。

・普段、勉強できないこと、深く考えていなかったことなどを自分自身で学ぶ・調べるということ。１年間やってきて、言われなくても自分から進んで調べる・勉強することが出来るようになった。

・いろいろな苦労や失敗があったけど、楽しかった事や新しく知ったこともあった。総合人間科は自分にとっていろいろな事を実際に体験できるものだった。

・他の人それぞれの生き方を学ぶことで、自分の生き方の参考に出来る。人生なんて偶然進んでいってしまうけれど、頑張ればうまくいく。人と人との強いつながりについてもわかった。

その一方で、次のようなコメントも多く見られる。

・アポイントメントの取り方、発表のやり方、お礼状など、社会に出ていくために大切なことを学びました。
・自分で調べる能力を身につけることができたので、道具にたとえるならば「盾」になってくれたと思います。
・自分から調べ、研究する楽しさ。調べる方法（フィールド・ワークやインターネットなど）。
・総合人間科とは、私にとって自分で調べることの楽しさがわかった授業。知りたいことを自分で調べて発表する授業。
・本やインターネットでは調べられないことがたくさんあることを知るいい機会になった。
・フィールド・ワークによって知ることがとても多かった。
・きちんとした手紙の書き方、知らない人との電話の礼儀、社会人の人との交流など、数多くのことを学んだ。
・私は総合人間科で「人に話を聞く（聞ける）ことの大切さ」と「相手の答えやすい質問を考えたり、自分で調べる」ことを学んだ。
・社会生活のための力（手紙の書き方、考え方、礼儀）
・自分にあった生き方をいろいろ調べ、他の人の見方・視点から学ぶことができた。
・フィールド・ワークを通して、手紙の書き方、人との交流、電話のかけかたなど、他のことまで学ぶことが出来た。
・自分の将来のことについて自分で調査をして、色々な関係のある人に自分でインタビューをするといった一見とてもめんどくさそうな授業だけれど、他の学校ではなかなかできそうにないし、まだ知らない人との関わりがあるので、とても将来役に立ちそうなことだと思う。
・フィールド・ワークで、会ったことも話したこともない人と電話で話すことで、上手に話すことの難しさを学んだ。

これらのコメントからもわかるように、総合人間科の取り組みから得られる達成感や具体的な learning outcomes（学習成果）を、自分が獲得したスキル（コミュニケーション・スキルとリサーチ・スキル）に見いだしているケースも多々ある。5月の第1回フィールド・ワークの時点ではスキル面で不十分な点があると保護者の「アドバイス・シート」で指摘されていたが、1年間の総合人間科の取り組みを通じてその点については次第に克服していき、最終的には、1年間の総合人間科の取り組みを通して、知識として「何を知ったか・何がわかった」よりも、スキルとして「何が出来るようになったか・何をしてきたのか」の方により大きな価値付けを行うという生徒たちの志向が存在することがうかがえる。

4．多様な学習方法と指導体制

総合人間科の学習方法については、「生徒各自の自己発見と併せて、今後6年間過ごす仲間としての集団作りも不可欠な目標と考えた。（徳井輝雄他，1996）」と初期の理念が受け継がれており、「仲間作り」や「学び合い」を意識した協同学習・共同作業の機会を可能な限り用意するようにした。中1の「生き方を探る」取り組みは、基本的には個人研究ではあるが、こうした協同学習の機会を通じて、他者と自己を相対化し、自己中心的な価値観ばかりを尊重・追求するのではなく、価値多元的な人間性を培うことが出来るのではないかと考えた。

《多様な学習方法の事例》

ア．個人での調査・考察・準備・発表
イ．ペアでの討論・準備・フィールドワーク（第1回）・発表
ウ．小グループでの意見交換・討論
エ．学級単位や学年での発表・意見交換
オ．学年全体でのレクチャー
カ．異学年（高3）間での共同プログラム
キ．テーマ・分野別の小グループ活動（第2回フィールド・ワーク）
ク．チューター（指導教官）制

ある生徒の総合人間科の感想に「授業は先生がいてなり立つものではなく、生徒だけでも出来るとわかった。」と書かれていたが、多様な学習方法を用意することによって、常に生徒たちは主体的に自分たちの学習ペースを作り、自主的に取り組みつつ、個人研究でありながら協同学習が前提となるこのカリキュラムに適応しているように見受けられる。

ただ、ペアや小グループの活動といっても、それぞ

表１　平成13（2001）年度中学１年生総合人間科１年間の取り組みの足跡

授　業　日	時　限	学　習　内　容	備考（教具など）
４月16日(月)	5	オリエンテーション（学年テーマ・授業概要説明、インタビューのスキル）	授業参観
４月21日(木)	３・４	第１回フィールド・ワークのペア決定、インタビューの準備	準備用ワークシート
４月26日(木)	５・６	交通経路・交通費調べ、質問項目決定、依頼状作成	ネット検索、封筒、切手 便せん
５月17日(木) ５月19日(土)	５・６ ３・４	第１回フィールド・ワーク（ペアを組んだクラスメートの家庭を訪問し、保護者にインタビューをする。）	質問項目プリント 評価用紙
５月24日(木)	6	礼状作成	ポスタル・ガイド
５月31日(木)	6	報告書作成	報告書用紙
６月２日(土) ６月７日(木) ６月９日(土)	３・４ 5 ３・４	第１回フィールド・ワーク発表会に向けての準備（発表の構想を練る、発表用原稿・提示資料作成）	発表計画用紙、Ｂ紙 画用紙、ペン、原稿用紙
６月14日(木) ６月16日(土)	５・６ ３・４	第１回フィールド・ワーク発表会	授業参観、プレゼンテーター アドバイスシート
６月30日(土)	３・４	高３総合人間科外部講師を招いての講演会	オブザーバー参加
９月27日(土)	３・４	後期の活動内容（興味のある職業に就いている人の生き方を調べる）についてのガイダンス	準備用ワークシート
10月６日(土)	３・４	個人テーマ決定、電話でのアポイントメント取りのためのスキル練習	スキル練習のためのプリント
10月11日(木) 10月20日(土)	6 ３・４	アポイントメント取り、質問項目決め、交通経路・交通費調べ、依頼状書き	メモ用紙、質問項目プリント
11月１日(木)	6	第二回フィールド・ワークに向けた事前研究プリント作り（資料の引用法、著作権についての学習を含む）	ネット検索、プレ研究 図書室利用
11月15日(木)	５・６	第２回フィールド・ワーク	評価用紙
11月22日(木)	５・６	礼状作成、報告書作成	便せん、封筒等
12月１日(土) 12月６日(木)	３・４ ５・６	第二回フィールド・ワーク発表会に向けた準備（発表の構想を練る、発表用原稿・提示用資料作成）	Ｂ紙、画用紙 ペン、原稿用紙
12月13日(木) 12月15日(土)	４５６ ３・４	第二回フィールド・ワーク発表会（各クラスの生徒の半数を他のクラスに入れ替えて発表）	授業参観 プレゼンテーター
冬休み		研究集録原稿の構想	
１月10日(木) １月18日(金) ２月２日(土)	6 ３・４ ３・４	研究集録原稿作成	研究集録用原稿用紙
２月19日(土)	３・４	１年間の活動をふり返って・反省	
３月10日(土)	３・４	来年度の活動のオリエンテーション	春休みプロジェクト

れの集団が孤立化してしまったり、他の集団とコミュニケーションが取れなかったりする場面も見受けられたので、今後は、大きな集団であっても小さな集団であってもインタラクティヴな活動を必ず伴うようなプログラム作りを目指していく必要があろう。

指導体制に関しては、例年通り学年団の「教官５人で80人を指導する」スタイルを基本としつつ、クラス・小グループ・ペアなどでの活動については、担任と副担任がチームを組んで生徒の取り組みをサポートした。後期の第２回フィールド・ワークに向けた取り組みにおいては、学年全体80名の生徒たちをテーマ別に５つの研究分野別グループに分け、それぞれのグループごとにチューターとしての教官を配置する指導教官制を導入した。「教官１人に対して16人の生徒」という少人数指導は、きめ細かな生徒のサポートを可能にし、第２回フィールド・ワークがとてもスムーズに行えた。

このように、生徒たちの学習集団の単位を「個」から「集団（ペア、小グループ、中グループ、学級、学年）」へ、そして、またその逆へと、スパイラルな形で変化されるに伴って、教官の指導体制も臨機応変にアレンジできたことは、学年団の教官の素晴らしいチームワークに負うところが大きかった。

５．1年間の活動内容

表１は平成13（2001）年度の一年間の総合人間科の取り組みをまとめたものである。例年のプログラムと比較して大筋で変更はなかったものの、前年度の平成12（2000）年度プログラムと比較すると、ひとつ取り組みを減らすことにした。前年度は夏休みにフィールド・ワークを行い、祖父母（またはその世代の人）にインタビューを行ったが、今年度はこの夏休みのフィールド・ワークをプログラムから削除することにした。それによって、次の４つの取り組みにより多くの時間を割くことにした。

①高３の学外講師を招いての分科会へのオブザーバー参加
②第１回フィールド・ワーク（及びその発表会）の反省と点検
③第２回フィールド・ワーク前のスキル・トレーニング
④第２回フィールド・ワークに向けたプレ研究

以下に、上記の４つの取り組みについて活動の状況を解説しておくことにする。

(1)高３の学外講師を招いての分科会へのオブザーバー参加

これは前年度にはなかった取り組みである。2001年６月30日に高校３年生が学外講師を招いて、テーマ別分科会（レクチャーとディスカッション）を行った。その際に、中学１年生も「オブザーバー」参加させてもらった。「生き方を探る」という総合人間科のテーマが中１と高３とで共通することから、本校における中高一貫カリキュラムの“入口”にあたる中１で「生き方を探る」取り組みをした後、“出口”にあたる高校三年生で再び「生き方を探る」時、先輩たちはどのようなことを考え、何を目指しているのかを知ることは、中学１年生がこれからの６年間の学校生活をデザインしていくことに大きな影響を与えるのではないかと考えた。

この取り組みの詳細については、本紀要の高校３年生の総合人間科の実践報告において詳しく解説されると思われるので割愛するが、この取り組みのように、学年の枠組みを越えてプログラムを共同実施することは、予想以上の効果が期待できると思われる。事実、中１の生徒も高３の生徒もお互いの学習姿勢に触れたことから新鮮な刺激が得られ、講師諸氏の間でも中１と高３がともに「生き方を探る」機会を持ったこの取り組みは概ね好評であった。

しかし、この取り組みは「イベント方式」の単発的な取り組みであったし、中１と高３とでは年齢や経験の差が開きすぎていることから、講師が講話内容のレベルを定めにくかったなどの問題点も見られた。（中１はあくまでも“オブザーバー”だったので、高３の生徒を対象にした講話をしていただいたら良かったのではあるが）今後はこの取り組み例のように、他学年との「学び合い」や連携をより充実・発展させていき、系統的で多様な総合人間科の新しい在り方を探っていくことも求められよう。

(2)第１回フィールド・ワーク（及びその発表会）の反省と点検

第１回フィールド・ワークが終わると、生徒たちはインタビュー相手から提出されたアドバイス・シートに目を通し、自分が行ったフィールド・ワー

クの取り組みについての反省を行った。その後、フィールド・ワーク発表会（報告会）を行ったが、さらにこの発表会の後で発表会自体についても反省と点検を行った。

総合人間科のプログラムが充実するにつれ、その内容は盛りだくさんになり、前年度は、次々にメニューをこなしていかなければならないというあわただしさを感じたことから、今年度は夏休みのフィールド・ワークを減らした結果得られた時間を、第１回フィールド・ワークとその発表会の反省と点検にあてることができた。特に問題を感じない生徒もいたが、「よりよいフィールド・ワークを行うにはどのようにすればよいか」「友だちのアイディアで参考にできるものはないか」などの視点から自らの取り組み状況を点検することから、第２回フィールド・ワークの取り組みにつながるフィード・バックを得ようと試みた。

(3)第２回フィールド・ワーク前のスキル・トレーニング

平成14年度より全国の小・中学校で一斉に「総合的な学習の時間」が実施されることもあって、多くの学校では試行期間を設け、段階的に「総合的な学習の時間」の取り組みを行い始めた。それに伴って、多くの児童・生徒たちが「調べ学習」の一環として街にフィールド・ワークに出かけるようになり、テレビ局や盲導犬訓練所などに代表されるようにフィールド・ワークの受け入れを申し込むのが困難な事業所・団体が増えてきた。原順子他(2001）も「課題は（３回目の）フィールド・ワーク先を確保することである」と指摘しているように、「自分が興味・関心を持つ職業・活動をしている人」を訪問してインタビューをしようとしても、断られたり、時間の調整がつかなかったりしてスムーズにアポイントメントが取れないことが予想された。

この問題に対処するために、あらためて「電話のかけ方」「アポイントメントの取り方」「交渉の仕方」の３点にポイントを絞って、スキル・トレーニングを行うことにした。スムーズにフィールド・ワーク先を確保するための手だてとして、生徒たちと次のような点について確認した。

□電話のかけ方□
- 自分が誰なのかしっかり名のる
- どういう用件で電話をしているのか簡単に説明する
- 誰と話がしたいのか
- 相手（担当者）が不在の場合はどうするのか

□アポイントメントの取り方□
- 何を目的としてフィールド・ワークを行うのかを説明する
- どのようなことを知りたいのか（質問例を２、３挙げる）
- フィールド・ワークで訪問を希望している日時と、インタビューの所要時間

□交渉の仕方□
- フィールド・ワークの希望日時が相手の都合と合わなかった場合、他の日時で調整できるか
- 訪問を断られた場合、他にどのような訪問先が考えられるかアドバイスを求めてみる。

このようなことに留意してスキル・トレーニングを行った上で、第２回フィールド・ワークの取り組みを始めた結果、比較的スムーズにアポイントメント取りが進められた。テーマが決まらずに困っている生徒は若干いたものの、テーマは決まっているのにフィールド・ワーク先が決まらずに困っている者はほとんどいなかった。前年度に危惧されたフィールド・ワーク先の確保の問題は、この年度の取り組みにおいては戦略的に緩和することが出来たが、これはアポイントメントを取る際に「フィールド・ワークの趣旨を相手にしっかり理解してもらって、協力をお願いする」、“交渉”することが徹底できたことと、断られるケースも多々あった中で、「では、他にこのようなインタビューができそうな事業所・団体（同業者）があればお教え下さい」と“アドバイス”を求めることも怠らなかった成果である。

以上のスキル・トレーニングの事例からわかるように、フィールド・ワークを行う際に毎年生じる問題点や課題を少しでも解決する工夫を取り入れると、飛躍的に取り組みがスムーズになると考えられる。

(4)第２回フィールド・ワークに向けたプレ研究

前掲の第１回フィールド・ワークの時に保護者に書いてもらったアドバイス・シートのコメントの中に、「インタビューする相手の仕事などについて、事前に調べたりしていると、より内容が深まったと思います。」「事前にインタビュー相手の仕事について、基礎知識を勉強しておくと、違った観点からの疑問が出ておもしろい質問ができるかもしれません。」などというものがあった。このアドバイスを活かしたいと考え、第２回フィールド・ワークの準備においては「プレ研究（Preparatory Study)」と銘

ある生徒の「プレ研究」（H．I．女子）

動物のいる人生

～動物園の飼育係の人～

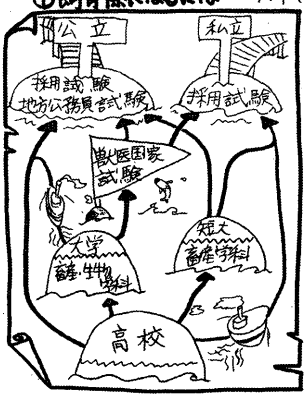
中学1年B組1番

☆ このテーマにした理由 ☆

「最近はペットブームだ」ということを聞いたことで、動物とふれあう時間がある人は、私のように動物が生活に関わっていない人と、どういう所が違うのかを比べてみようと思ったからです。

☆調べたこと☆　出典　平 動物園ホームページ　動物園が大好き　将来の仕事なり方完全ガイド　動物園で毎日働く

①飼育係になるには…大卒でなくてもいいけど獣医免許をもらったり、畜産の学科を出たりすると得だそうです。空きは少ないものなので新しい園がオープンするときぐらいしか就職の機会がありません。



OPEN

向いている人

きれいに好きだけど、汚物への抵抗感がない人。早くからおそくまで立ちっぱなしなので体力もある人！動物を自分の分身のように愛せる人。観察などもしなくてはいけないので研究熱心で好奇心旺盛な人。

②飼育について

係の人がすること

- 動物小屋などの掃除（ふんの様子も観察）
- 動物たちの健康チェック（病気やけがの有無、動き方、歩き方、毛のつやなどを入念にチェックし日誌に書く）
- 給餌（コアラの食べるユーカリの葉は動物園内で育てている所もある。）

注意・工夫

- 動物たちはにおいや、色で飼育係の人を覚えているので、係の人はいつも同じ服を着、洗濯も園で。
- 東京のある動物園では入りたての飼育係は、日本の動物や家畜などの世話を、ベテランの人に教わりながら数カ月なれるまでする。

未来の動物園　未来の動物園には「少ない動物の種の保全」という役目も期待されている！繁殖のためには他の園から異性をかりてくるそうだ。

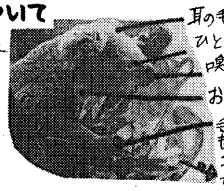
③コアラについて

巣を作らない夜行性

体重は6kg

最近は色の開発などで減っている。

生息地



耳の毛はふさ状に生える

ひとみはたて長

嗅覚はするどい

お腹は白か灰色。

手足は発達し、つめ長く、木を登るのに適

ユーカリの葉は水分がタップリなので水は飲まない。

☆感想☆　調べれば調べるほど飼育係の仕事が書いてあって、とってもりっぱな仕事がわかりました。そんな中、フィールドワークに行かせてもらうので、がんばらなきゃいけないと思いました。

同じ生徒の「研究集録の原稿」（H．I．女子）

動物といる人生

1年B組1番

元獣医の動物園動物会館館長さんにインタビュー

① テーマ設定の理由

動物を育てていくことを真剣に職業として取り組んでいる人は、ペットとしてしか動物をみていない人と考え方はどうちがうのか、ということが知りたくな、たからです。

② プレ研究からの流れ

プレ研究では飼育係について調べましたが、インタビューさせていたいたのは獣医さんでした。でも、職に就くまでの大変さ、なってから注意、工夫しなければいけない所は同じようでした。

▶左から2番目の人がインタビューさせていただいた大野敏さん（東山動物園動物会館図書室）

③ 研究成果

大野さんのすごいところ

コアラを担当していて大変だった事

- コアラが日本に来たのが初めてだった所
- コアラは食べることのできるユーカリが限られているということ
  ➡全国6か所にも万本植える。そうすれば台風が来ても全滅はしない。
- コアラやカンガルーなどのふくろのついている動物はカビ系の病気にかかりやすく、コアラは病気になっても食べなくなる、など治そうとしない。
  ➡注射をする。

大変そうだな、と思ったこと

- しっかり観察する（フンの数まで！）
- 普通の勤務時間は8：45から5：15までだが、動物が病気・出産のときは夜の10：00頃になることもある。
  ⇨いつ病気になるのかはわからない。
- 休日も動物の勉強をする。
  ⇨獣医の場合だと看護婦がいないので朝は園に来る。

こんなに大変なのにやめたい、と頭にうかんだことは、ただの一度もない。

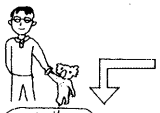
？なぜなのでしょうか？

仕事のやりがい

動物を増やして放すこと、長生きさせること。

仕事をしていてうれしいとき

新しい生命が生まれたとき。



生き物と暮らす

大野さんは小さい時には家の近くの野山できつねなどを追っていた。

園に通いはじめてもしっかり観察などをする。

生き物と暮らして、

動物も人間も同じ生き物だと思える

私がした、「大野さんにとって、コアラとはどんな存在ですか？」という質問に、「最大の恋人だなあ」と答えていただいた。恋人というのは普通「人」をさすことから、同じような生き物だ、と思っているのかなぁと思った。

動物も人も同じだと思えて、

動物のことを大切だと思える

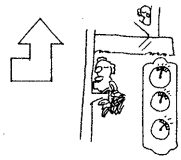
大野さんは、インタビューのはじめに、日本の動物が減っていることなどを話してくれた。それに、休みの日も朝は園に来たりしている。

大野さんはとても動物を大切に思っていることが分かった。

動物のことを大切だと思うから、

生き物の世話を上手にできる

その気持ちがあるから、生き物の世話も上手にできる。



④ まとめと感想

結論　動物のために真剣に取り組んでいる人は、ペットとしてしか動物を見ていない人より、「動物は大切だ」ということがよくわかっていることがわかりました。だから大野さんはどんなにつらくても大変でも、動物のために休まず働いたりできることがわかりました。

感想　動物を大切に思い、動物のため、と働いている大野さんのことが知れてよかった、と思います。大野さんみたいな働き方はかっこいいな、と思いました。職業として、じゃなくても、なんでも、「○○のために」と○○に集中して進んでいきたいな、と思いました。

⑤ 今後の課題

FWではもっとはきはきしたかったです。全体では、答えをみつけようとしているときに、これは思い込みじゃないかな…？と不安になったりもしたので、質問項目をもっと詳しくしておけばよかったです。来年は質問項目を日頃から少しずつ決めておきたいな、と思いました。でも表現が失礼になってしまったりもしたけど、なんとか自分なりに、「こうだ！」と答えが出せたので来年も少し大変なテーマでも挑戦してみようかな、と思います。

打って、Ｂ４版の原稿に事前学習した内容をまとめることにした。

通常、フィールド・ワークの事前準備にはかなり多くの複雑な手順を踏まなければならない。

①テーマの検討・設定
②訪問する職種・事業所（団体）の決定
③フィールド・ワーク先の住所、電話番号、担当部署（担当者）調べ
④質問項目の検討
⑤アポイントメント取り
⑥依頼状の下書き・清書・発送
⑦交通経路・交通手段・交通費・所要時間・時刻表調べ
⑧記録方法・準備物の用意
⑨インタビュー練習

これら一連の作業に加えて、プレ研究を行うことは、生徒にとって大きな負担となるが、その分、その効果と役割は大きい。この年度はフィールド・ワークを１回分減らしたことによって得られた時間的余裕を最大限活用し、このプレ研究に時間をかけた。11月15日㈭に行った第２回フィールド・ワークまで、夏休み明けの９・10月と11月の前半の約２ヶ月半を先述のスキル・トレーニングと第２回フィールド・ワーク準備に費やした。

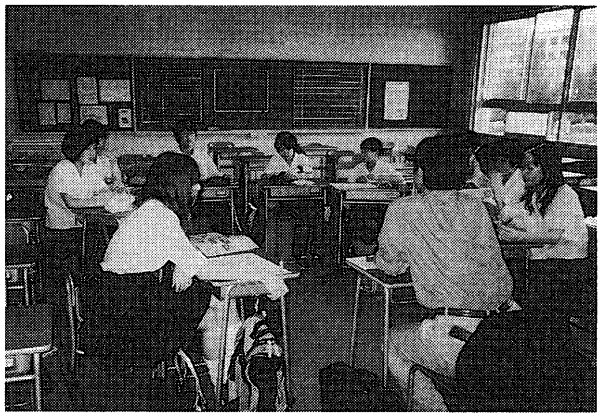
プレ研究においては、次の項目を必ず含めるように指示した。

①研究テーマと題目
②テーマ設定の理由
③調べたこと・わかったこと
④プレ研究の感想

この取り組みによって、ターゲットとしたテーマや題材についての基礎知識・予備知識を獲得するだけでなく、「そもそもなぜこのテーマについて自分はリサーチをしているのか」について明確な動機付けと目的意識を高めることが出来た。また、この段階でプレ研究として自分たちの研究内容を一旦整理し、下地を築いておいたため、後々研究集録の原稿を作成するときにもスムーズに作業が進められた。

６．今後の課題と展望～まとめにかえて～

平成７（1995）年から続けられてきた総合人間科の実践の蓄積によって、中学１年生の年間プログラムも極めて安定したものとなってきた観がある。過去６年の実践内容をそれぞれ比較してみると、細かなプログラム内容の増減はあるものの、その年ごとに担当した学年団によって様々な試行錯誤や創意工夫が加えられ、毎年担当者が変わろうともある一定水準で運用できるようなプログラムが完成されている点は、大いに



評価できるのではないか。また、生徒の感想に見られるように、知識や社会に関する知識・常識・慣習の獲得という面、内面的成長の面、そしてスキル・トレーニングの面などそれぞれの側面において、大きな達成感と成就感が得られていることも明らかになっている。

しかし、時代の流れに伴って、いくつかの点において限界が生じていることも事実であり、以下本章においては、まとめにかえて今後の取り組みに向けての課題と展望を述べておきたい。

⑴「学校週５日制」への対応

総合人間科の取り組みには、生徒たちは多大なる時間とエネルギーを注ぎ込む。時には、様々な作業を平日の放課後や土曜日の午後の時間を使って、時間を忘れて取り組みを続ける。ところが、平成14（2002）年度からは「学校週５日制」が導入されることから、これまでのように第１・３・５週目の土曜日の午後を使って作業を行うことが出来なくなる。加えて、現在では第１・３・５週目の土曜日の午前中に実施されていた「ソーシャル・ライフ」と「総合人間科」の授業が平日に組み込まれるため、月～金の５日間が何かと窮屈になることが予想される。学校週５日制の導入によって、生徒たちの日常の学校生活が具体的にどのように変化するかは完全には予想しきれないものの、少なくとも何らかの形で学校週５日制のカリキュラムに適応できるような見直しと改良が不可欠になろう。具体的には、年間のプログラムの内容を削減したりして、限られた時間内で達成可能な運用を心がけることになるであろう。

⑵プログラムの発展的抜本改革

中学１年生のみならず他の学年においても同様であろうが、本校の総合人間科のプログラムが「安定した完成したもの」であるからこそなお、今一度、さらなる発展的抜本改革が必要な時期にさしかかっ

表２

2001年度中学１年生総合人間科個人研究テーマ一覧表			
Ａ１	家＆英語は大事！	Ｂ１	動物のいる人生
Ａ２	目指せ♥ナイチンゲール	Ｂ２	ビジネスとエンターテイメント
Ａ３	警察（刑事）と犯罪－なくなる日は来るのか－	Ｂ３	人に役立つ物を作る－ロボット研究の人生とは－
Ａ４	あこがれた職業の現実とは…？	Ｂ４	プロゴルファーとは？
Ａ５	創り出す喜び	Ｂ５	獣医師動物と共に生きる人生
Ａ６	インタビューで大切な物　臨機応変	Ｂ６	芸術と共に生きること
Ａ７	HOBBY&LIFE	Ｂ７	本をMAKEする人達
Ａ８	夢を追いかけ掴み取る	Ｂ８	獣医さんにとって動物の命とは？
Ａ９	知られざるペットショップ	Ｂ９	みんなの助け　白衣の天使の生き方
Ａ10	人との関わりの多い人たち	Ｂ10	（転校）
Ａ11	出会いと生き方	Ｂ11	作り上げる苦労と喜び－EXPO2005 AICHI－
Ａ12	多人数の命を預かる	Ｂ12	VIDAL SASOON
Ａ13	終わりのないモノ…。	Ｂ13	市電を運転した人に聞く
Ａ14	体験と出来事／警察官と市民	Ｂ14	Myライフワーク　スポーツドクター
Ａ15	社会に出るということ	Ｂ15	喜べる仕事・喜ばれる仕事
Ａ16	いろいろな人と関わって	Ｂ16	人＋環境＝ＢＵＳ
Ａ17	今までの歩み、これからの歩み	Ｂ17	一人で仕入れて売る仕事
Ａ18	やりがいのある職業	Ｂ18	いくつもの努力は１台のロボットに…
Ａ19	毎日を精一杯生きる！	Ｂ19	小澤先生の学者としての生き方
Ａ20	生きがいのある仕事とは	Ｂ20	平等なる命を守る－獣医の仕事・生きがい－
Ａ21	女性にとっての仕事	Ｂ21	命を守る仕事－気象予報士－
Ａ22	学び、成長できた私	Ｂ22	裏方の仕事の大変さ　魚市場の管理の仕事
Ａ23	学ぶこと。教えること。	Ｂ23	馬と一緒に歩んだ道
Ａ24	仕事からの学び、教え。	Ｂ24	有松しぼり
Ａ25	２度のフィールドワークを終えて	Ｂ25	動物と共に生きる　トリマーの人と動物
Ａ26	夢に向かって	Ｂ26	今では、かかせない手話通訳者の人々。
Ａ27	日本語教師－夢から実現へ－	Ｂ27	チャンスをつかもう－夢をかなえるためには－
Ａ28	職業＝責任の塊	Ｂ28	つながり
Ａ29	周りの事を考える	Ｂ29	スクール☆カウンセラーのやりがい
Ａ30	喜びを与える	Ｂ30	何気無い見方について
Ａ31	総合人間科が始まって	Ｂ31	マイクロロボットを作る人達
Ａ32	運命を信じて…出会いとは	Ｂ32	海の動物たちとふれ合う仕事
Ａ33	小さな「出会い」から…	Ｂ33	７人殺して一人前
Ａ34	人を助ける仕事	Ｂ34	人は意外なところで変化する＆ゲーム販売
Ａ35	スポーツと成長	Ｂ35	人と動物。変わりゆくＰＥＴたち。
Ａ36	福祉の仕事	Ｂ36	習字上手
Ａ37	人との出会い＆交流は大切	Ｂ37	撮って知った火星の不思議
Ａ38	人々を支えてきたパイロット＆先生	Ｂ38	美容とともにする仕事
Ａ39	体験により変わりゆく自分	Ｂ39	心を支えたのは動物だった
Ａ40	パソコンと保母　生き方探し　夢追い	Ｂ40	犯罪を犯す少年とそれを止める少年課

ているのではなかろうか。平成14（2002）年度より全国の学校で一斉に「総合的な学習の時間」が実施されることもあり、本校が今後も総合的な学習の実践においてオピニオン・リーダー的地位を確保するためには、他校における実践の研究や、校内における自己点検などの活動を積極的に行い、「学年テーマの見直し（表２参照。個人研究テーマも年々固定化してきた。）」や「学習方法・活動の転換」、「評価に関わる理念形成と実践」「新発想に基づくプログラムの開発（例：他学年と連携して異年齢で取り組みを進めるなど）」に取り組んでいく必要があるであろう。

特に、今後中学１年生に新入生として入学してくる生徒たちの全ては、小学校においてすでに「総合的な学習の時間」の取り組みを経験した上で入学してくることになる。小学校における積み上げを活かせるような中学校の実践であるためには、初等教育現場における実践の研究や調査も必要になろう。

(3)中・高・大の連携を意識したプログラム開発

現在本校においては、総合人間科だけではなく高校１・２年生の新教科群の実践や、中学２・３年生の選択プロジェクトなど、さまざまな分野・領域において「中・高・大」の連携を強化したプログラムの開発が進められている。中学１年生の総合人間科の実践においては、個人的に第２回フィールド・ワークにおいて名古屋大学のスタッフのもとにインタビューに出かける生徒もいるが、学年全体のプログラムとしては特に「中（高）・大連携」のプログラムの開発と実践が実現していない。今後は、例えば、およそ100名にものぼる名古屋大学のスタッフが登録された「スクールボランティア」の制度を活用したりして、新たな取り組みを展開していくことも視野に入れていきたい。

参考文献

・木下雅仁「5. 大学との連携をいかした青年期のキャリア形成総合人間科（総合学習の成果）■中学１年」教育学部附属学校自己点検・自己評価委員会編『2001年度附属学校自己点検・自己評価報告書新しい中等教育の創造―併設型中高一貫モデル校として―』名古屋大学教育学部附属中・高等学校、2002年。

・原順子、今村敦司、飯島幸久、木下雅仁、大口悦子「2000年度総合人間科の取り組み　中学１年生　生き方を探る～出会いから学ぶ～」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第46集、2001年。

・石川久美、藤田高弘、米田潤一、大口悦子「1999年度総合人間科の取り組みと公開授業の実践報告　中学１年生　生き方を探る―人との豊かな学び合いから考えよう―」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第45集、2000年。

・川合勇治、湯沢秀文、鈴木克彦、佐藤喜世恵「Ⅰ. 総合人間科　中学の実践報告1. 中学１年生き方を探る―新たな出会いから学ぶ―」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第44集、1999年。

・中村明彦、今村敦司、高須明、丹下容子「Ⅱ. 総合人間科第三年次の実践報告1. 中学１年インタビューを中心とした生き方を探る活動について」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第43集、1998年。

・安彦忠彦・名古屋大学教育学部附属中・高等学校『中・高「総合的学習」のカリキュラム開発』明治図書、1997年。

・矢木修、中村明彦「Ⅱ. 総合人間科第二年次の実践報告1. 中学１年出会いから学ぶ―人と地域から生き方を探る―」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第42集、1997年。

・徳井輝雄、湯沢秀文、長岡咲子、寺井一「中学１年『生き方を探る―人と地域から、自己発見の機会』」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第41集、1996年。

・寺井一、徳井輝雄、長岡咲子、湯沢秀文「総合人間科初年度第一次報告各学年の取り組みから　中学一年学年テーマ『生き方を探る―人と地域から、自己発見の機会―』」名古屋大学教育学部附属中・高等学校編『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第40集、1995年。